葬送・先祖祭祀における嫁の家族実践
――奈良県旧都祁村地域を事例に――

森恭子（同志社大学大学院）

本発表は、Morgan（2011）の家族実践論にもとづき、家の象徴とされ女性の抑圧問題を孕む墓・先祖祭祀の慣行に注目して、家族実践とはいかなる実践なのかを検討する。

70 年代の第二波フェミニズム運動から生じたフェミニズム理論は、公私領域の分離とそれにともなう性役割があり、男性による女性の性支配を明らかにした。そして、抑圧の元凶を、固定化された性別役割分業による経済的依存であるとし、女性解放には経済的自立の必要性を示した。第二波フェミニズム運動において、墓・先祖祭祀も女性の性役割の一形態として批判的に論じられた（井上、2009）。婚家の墓に入ることが自明とされてきた嫁は、自らの自由な選択として、労働で得た賃金で自身の墓を建てるなど新たな選択肢を見出した。他方、自らの選択の重要性が強調されることにより、選択に至らない日常的な嫁の悩みや選択せざるを得なくなる状況や社会的文脈は議論の俎上から捨象されることになる。

嫁を取り巻く家族の変化に目を向ければ、家制度が戦後廃止された以降も、「戦後の家族体制」として家規範が維持され、義父母との同居や介護が当然とされていた。70 年代半ばには主婦が大衆化する一方で、嫁姑問題をテーマとしたドラマが大きな反響を呼ぶなど、依然として嫁の問題が認識されていたといえる。嫁が担うことが当然とされた嫁介護は、2000 年の介護保険制度の導入により、嫁介護の自明性は弱体化した。嫁姑研究においても、80 年代以降の嫁と姑の関係及び役割について、孫の世話を担い、孫をかわいがる祖父母という新たな役割を担うようになり、姑に仕える嫁というかつての嫁姑関係から大きく変化している（山脇、2004）。近年では、義理実家への帰省についてみれば、宿泊を伴わない帰省、夫と子どもだけ帰省するなどさまざまである。このように、現代において、嫁の役割は曖昧なものになり、自明とされてきた婚家との関わりも多様になっている。こうした嫁を取り巻く家族の変化は、なお嫁が選択せざるを得ない役割や、そこにいたる状況を不問とする効果をもたらしてきたのではないだろうか。嫁を実践しない妻は、もはや夫との家族とはいえないのだろうか。

そこで、家族実践という視点に立脚し、嫁が置かれた選択せざるを得ない――葬送・先祖祭祀にかかわる――状況を、「displaying families（家族ディスプレイ）」（Finch, 2007）という概念を適用し、嫁の家族実践として捉える検討をおこなう。

本発表では、2023 年から 2024 年に断続的におこなった参与観察および奈良県旧都祁地域に在住する嫁役割を担っている女性を対象に実施した、葬送・先祖祭祀についてインタビュー調査を検討する。インタビューは、半構造化インタビュー法で、1 から 2 時間程度で数名に実施した。これらの調査から、嫁にとって婚家の葬送・先祖祭祀に関わることが、家族や親族のみならず、共同体にたいしても自分自身が「家族であることを表示する」装置としての葬送・先祖祭祀の側面が見出されるだろう。家族ディスプレイの装置としての葬送・先祖祭祀という視点の意義は、嫁自身が先祖や祭祀の重要性を感じているというよりもむしろ、それを重要とする人（義父母や夫、親族など）との関係性やニーズへの応答責任として葬送・先祖祭祀への関わりを捉えているという理解の可能性を示す点にある。最後に、本発表の事例検討から、家族実践という視角の有効性及び課題について考察をおこなう。

＜参考文献＞

Finch, Janet, 2007, Displaying Families, *Sociology*, 41(1): 65-81.
井上輝子、2009、「日本の女性学と『性役割』」、天野正子ほか編集委員、『新編日本のフェミニズム３　性役割』、岩波書店、2-37.
Morgan, David. H. J., 2011, *Rethinking Family Practices*, Palgrave Macmillan.
山脇敬子、2004、「戦後家族における嫁姑関係」、日本社会学会第 77 回大会、報告原稿.

（キーワード：嫁役割、葬送・先祖祭祀、嫁姑関係）